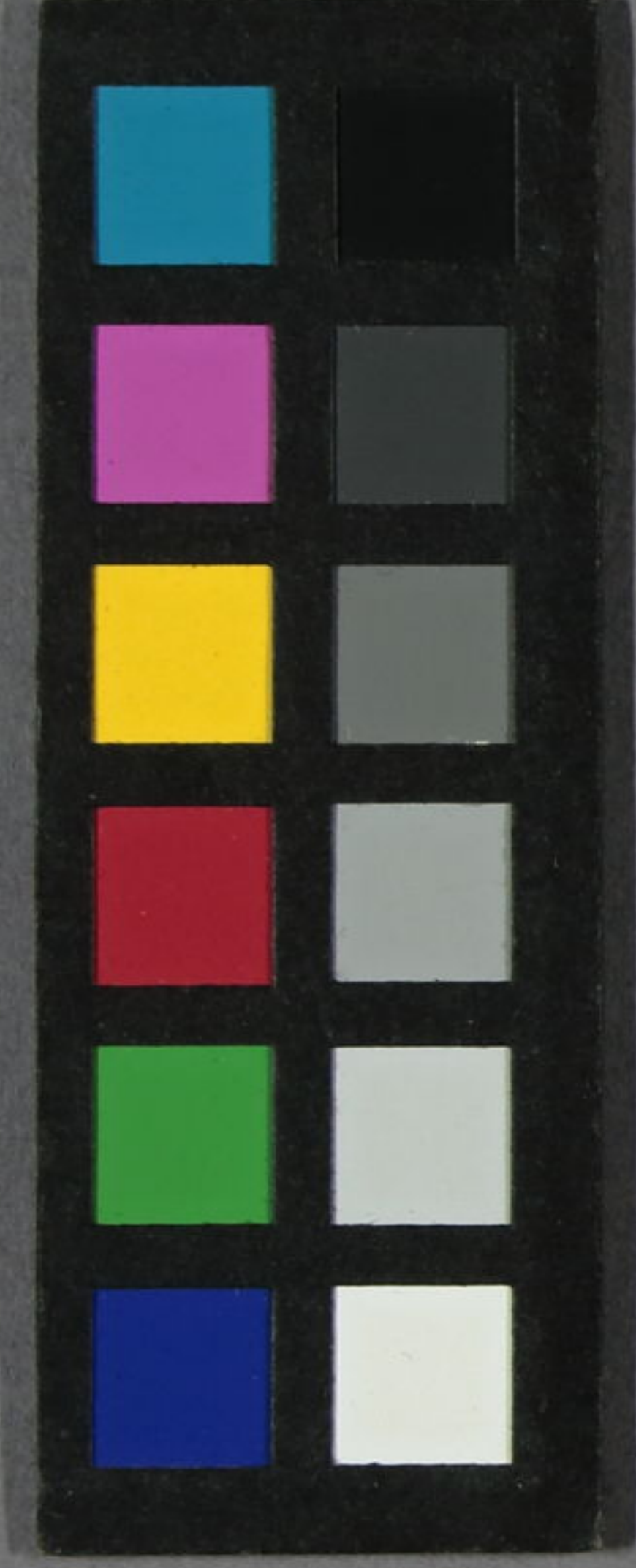


西宮偶記

避險危齋



五月雨の記

五月雨の記 3441

五月雨の記



関東國雅ふよりて彰義隊と号けりる同盟のりめふ
教子人^レ上野の東叡山小集令^レく煥とるるわくを

破え^レ一舟が坤あひ義勇の為ふを^{スラ}と棄てこの隊^{アレ}
かりたも何皇政ひの事を好^レて命^ナも^ナ死^ナな^レら^レの^レ記^レ
か^レく^レも^レわ^レり^レ或^レひ^レを^レ傷^レた^レも^レ何^レと^レん^レ結^レぶ^レど^レふ^レ件^レの^レ
人^レく^レ太^レ政^レ官^レの^レ命^レ令^レふ^レ後^レび^レる^レは^レし^レわ^レと^レそ^レ畢^レ月^レ至^レの^レ曉^レが^レ
官^レ軍^レ敵^レふ^レ押^レよ^レせ^レ弟^レの^レ南^レを^レ弟^レ遠^レ見^レ附^レより^レ歩^レ出^レて^レ悪^レ門^レに^レ
攻^レり^レ東^レを^レ和^レ泉^レ橋^レを^レら^レ渡^レて^レ車^レ坂^レを^レ攻^レま^レ西^レの^レ一^レ段^レを^レ

中より湯沸めあり其町仲町より石巻の池柳小押寄
 今一丁隣の谷中けりして水の方天坐るの茶後小通^キりぬ軍
 配^クの内^ノに^シく^ルなる大玄一時小起り立て透^{ロク}る^ク^テ 石^シ藤^フを
 ち^ク々^ク固^クと大^ク砲^ク小^ク銃^クを^ク打^ク出^クして^ク 轟^ク然^クと^ク震^クる^ク後^クに^クそ^クめ^クを
 黒^ク門^クを^ク穿^クする^ク西^ク東^クの^ク民^ク屋^ク忽^ク地^ク烟^ク塵^ク起^クり^クて^ク火^ク光^クを^ク雲^クを
 漂^クさ^クし^クめ^クり^ク折^クり^クも^ク淋^ク時^ク雨^ク降^クつ^クて^クも^クこ^クて^クも^ク折^ク小^ク雨^クが^クら^クい^ク
 風^ク吹^クき^クる^ク南^クより^ク々^ク々^クい^クい^ク水^クは^クな^クが^クく^クる^クを^ク幸^クひ^クい^クふ^ク一^クと
 子^ク度^クを^ク右^ク蜀^ク七^ク八^ク町^クを^ク去^クり^クて^クも^クま^クど^クの^ク火^クの^クぐ^クれ^クた^クり
 折^クて^ク面^クの^ク橋^クより^クち^クあ^クり^クて^クそ^クの^クり^クし^ク柿^クと^ク隣^クに^クめ^クは^クつ^ク

勝負^クの^クつ^クか^クと^ク見^クる^ク中^ク秘^ク小^ク衢^クの^ク老^ク多^クの^ク男^ク女^ク何^クへ^クて^クま^クど^クい^クく
 東^ク西^ク菊^ク水^ク小^ク逃^クら^クる^ク舞^ク哭^クの^ク多^ク淋^ク曉^クと^クて^ク致^クし^クい^クの^ク樓^ク屋^クを
 一^ク言^ク老^ク人^クの^ク杖^クは^クま^クど^クり^クて^クま^クど^クめ^クく^ク何^クも^クば^ク布^ク子^クを^ク身^クに^クま^ク
 と^クい^ク一^ク痛^ク老^クの^ク人^クの^ク肩^クを^クカ^クみ^クの^クを^ク幸^クは^クて^ク歩^クり^クむ^クも^クあり
 致^クし^クい^クの^クり^クら^クら^クの^ク衆^クひ^クく^ク人^クを^クう^クた^クの^クけ^ク押^ク中^クの^ク時^ク夜^クを
 一^ク言^ク云^ク骸^クあ^クや^クま^クん^ク撰^クと^クき^クり^クて^ク弟^ク姉^クも^クあ^クり^ク者^クは^クら^クろ
 一^ク言^ク一^ク言^ク中^クの^クを^ク急^クぐ^ク足^クり^クの^ク石^ク小^ク瓦^クづ^クれ^クて^ク糞^クび^クく^クも^クい^ク
 共^ク作^クま^クり^クて^クま^クの^ク徒^クを^クあ^クり^クま^クら^クせ^クて^クお^ク月^ク面^クの^クた^クの^ク泥^ク濘^クは
 汚^クら^クら^クづ^クら^クと^クは^クて^クあ^クり^クぬ^クん^ク又^ク乳^クの^クを^ク子^クを^ク懐^クろ^クゆ^ク

四ツどろりの稚子をめくさる女の背より腰より拘換へつけ
 細帯のりて結縛し其子を落ししとの用表さるべく爰も
 おどろふより絶へたる程七ツハツむらりのりて手をは
 ひきて母子あはしく死脱する流鏝より血の流るるを
 見るも何うも何うも死脱する所よひるまをわく
 より連夜の劇炮大砲と震動すると今朝より絶る間ま
 くてりるも何うも何うも死脱する所よひるまをわく
 来のわめを守るに軍坂する寄るよりおどろく人破裂あり
 激しく響し中巻の巻をつむ思ひより強然とあり

立沖をバネの釣堀玉の掬るゆりりハホとありたる
 勢ハ強しして燦燦とあり御も何らせげ西ハ三門釋氏
只有一門亦呼為三門若何也佛地論云 大官殿三辭殿門為所入處云々 東ハ四軒と町んん一時ふ
 燃る大宅界さるも冥未宵一ある台散舞峯の大蘭若ランニヤ
 鐘額梵唄さるまらふ花智縁波とて急繩泥掣の
 変相とるる若さる若さるのさるらば紙う流涙さるる
 いたる傳入関り治承四年の冬とて平の重衡興福東
 大の両方を焼とえ龜二年秋八月信長敵山を焼たり
 しも新中とてふさるる鳴呼七佛經ふ所續佛益也

獲の十八種をいづき入る行まくる本日山内を越越死の
 のふりくぐりや押彰義の隊名を今うきぬるや
 又何らむや弁ハハが案の案うた後論法教下ニテオケ
 とのふり何いりるるまは後園不日ごろ東列一考の
 とふも変るむと鳴ふぞ何うなる

美なるをいづくともあはれ老とむふ

又よ峰標為標ト

ともだまの雨がり谷ふまがしむは

時好くなくふ郷がくくぞはく

歎ひハを美成る小果もまは聖朝のくさ火の美ふめくくる者も
 人将を流もんとて廣小路をさうつ山形をえ渡もふ香烟尾
 新の徳樹林も深ぬおおとる枝を彩も幹ハ別れくて木の
 くれもぞと向くともは後秋風が吹はるればと作いらん雪の
 松ぬあつてさうくふ交もさうつふ交もくくあがゆ

吹うまくも流る松美かと青嵐

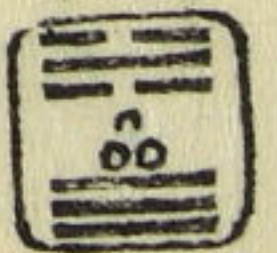
そとあつて美死の亡骸様くこりて互かればあまの人の感
 ねぬは定小慟慟くる形勢を名ふ小標もま世のむら
 流離まの暴れお目連将氏の眷族お百人を狩申ふ路ひ

一も世の定業むほくらんてまゝ餓死をうらん因縁縁縁の
理コトハの選佛場センバツチヤウと死出の山を身を教とりのならしむ

目連の鉢舟入ても其のむし

于時慶應四歳次戊辰夏五月

武江口南樵夫蕉華老人萩原乙彦識



おうらひえられば附載と

東台のそ方をとるく 梅垣番洋

ありの言う人望みのうまおらひよる

照射のひくまをうめきさうか

あゝのまはくくは家より又まあくはま
新那中よりうろけむきをそ新那あつ

あまのく鶴やふりともふく 春湖

あまのくま直る世とひひたり 葱玉

あまのくあわらうて悲ふりとの毛 潮堂

あまのくあまの晴中うぬわるとまん 田楽

あまのくあまの松玉とあまのま 為山

川傍の大河へまゝいんこく
皇月六日ふまはしうは程世の程か
らねまひくはらあまのあまのいんこ
くが物まは今のまがまのまのま

けされのきれて海や拍のうら

知昔

徳川内家士の多くは室町将軍より
よそを去る所なきを推して

み月るの晴ると松のこころ

其去

夢妙よそ所へ観ひの所へ
さなとつてくはて

雲細の結を梳りたむらう

其海

舟の國々ひよ種人の心
よこてきりたる

うら雲のたけりまぐら

岩槻五
松 陸

あまきりまき様屋しり

人をも何りきり

コガの晩^{ヤロヒ}よそよりくるを梅庵へ送る一文字中ふ
言ざれらる夜あじし風く去の風とらふを
き返さるふ

あまきりまき様屋しり
あまきりまき様屋しり
あまきりまき様屋しり
あまきりまき様屋しり
あまきりまき様屋しり
あまきりまき様屋しり
あまきりまき様屋しり
あまきりまき様屋しり
あまきりまき様屋しり
あまきりまき様屋しり

